

年間第27主日

福音朗読 マタイ 21・33-43

2023.10.8 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

わたしたちの信仰生活にとって大切なことの一つとして、自分自身の在り方を外側から見直してみるといえると思います。外側、神様のものの見方で、と言うとそこまでわたしたちは全部を見通すことができないけれども、神様の助けによって出来るだけ、今の自分のものの見方ではない、より広い、あるいは上からと言うか、違う角度からそういうふうに自分自身の在り方を見直すということが、信仰生活の大切な面の一つなのではないかと思います。

わたしたちそのものは、肉体の目というのは自分を全部を見通すことができない。それと同じように心の目もいろいろな出来事の理解の仕方であったり、もの事の他の人々の見方というのも、全部自分を中心にして捉えてしまう。そういうものの見方、考え方から一旦離れて、違うふうに自分そのものを見てみるということです。

たとえ話というのは、自分に直接関係がないことのようにお話を展開して、でもそれがあなたにもそのことが当てはまるのではないかというふうに最後に問いかけられるので、自分のことを違うものの見方で見直してみることの一つの助けであるわけです。

今日の第一朗読であるイザヤの預言、そして今朗読しましたマタイによる福音のたとえ話、それぞれぶどう畑、あるいはぶどう畑を作る人が出てきましたけれども、他人の^{ひと}ことだとわたしたちは間違っているとかな足りないことというのをよく気が付くことができる。しかし振り返って今度自分も同じようなものの見方で考える、そのための一つの助けとしてたとえ話があると言うことができます。

今日の福音のたとえ話だったら、普通、一人でぶどう畑を作って、そして垣を巡らして、見張りのやぐらまで立ててって言う、一人でそれを全部する人はいない。だから非現実的なお話なんですけども、でも、もしそういう人がいたとして、って言うふうに問いかけてきます。そして、必要なことを全部やって、当時の農業というのは今のぶどう園と違って、ぶどうがだんだん実ってきたら袋をかけたりとか、こまめに虫を取ったりとか、そういうことがない、一旦植えたならば、あとは収穫の時を待てば良い。もちろん収穫そのものは大変な——限られ

た期間で全部完了しなければならないから大仕事になることは確かですが、今日のイエス様が語られたたとえ話では、ぶどう園の準備というか設営とか全部をその持ち主はやって、あと、収穫のために農夫たちに貸して、そして旅に出た、そういうことなんですよね。全部やってる。あとは収穫すればいい。でも、収穫する段になって、自分たちが集めたものを主人に返すことが惜しくなる。だから何度もそれを主人に渡すようにって言う使者が来ても全部拒絶してしまうという、そういうたとえ話の中で、「それはひどいねえ」と思っていると、「わたしたちと神様との関係もこういうものではないのか」というふうに問いかけられるわけです。

もちろん、「ちゃんとしないと神様から捨てられてしまうよ」とか、そういうことが一番言いたいということではなく、むしろ、全部を神様から頂いているけども、わたしたちはそれを初めから自分が持っていたかのように当然のものとして用いたりしていないかな、それはある意味では「ひどいね」と思った——他人のことならよく分かる——農夫たちと同じではないのか、という問い掛けなんだろうと思います。

第二朗読もそうですね。第二朗読は大体いつもパウロの手紙が朗読されます。パウロが、自分が設立した教会をあとにして、そしてまた違う場所に出かけて行く。そんな中で、外側から色々な知らせを受けたりして、自分の設立した教会を外側から見ているときに、いろんな問題が見えて来るということがあるわけです。フィリピの教会というのは比較的パウロの教えに従って一所懸命やっている共同体だと言われています。それでも、やっぱり「こういうことには注意してほしい」って、そして「離れた所でもわたしも信仰によって希望を持って生きています」——フィリピの手紙を書いた段階ではパウロは牢屋に入っているわけですが、牢屋に入っているけども「なんで神様のために牢屋に入らなきゃいけないんだ。神様は助けてくれない」とかブツブツ文句を言うのではなく、そのことにも意味を見出して——「希望を持って生きております。だからあなたたちも同じように励まし合いながら信仰の道を歩みましょうね」というのがフィリピの教会への手紙です。

外側から見て、パウロがいろんなことが分かる、そして励まされる。それがあとの時代になって、フィリピの教会の人たちだけでなく、ここで言われていることは自分たちにも当てはまると感じたいろいろな各地の共同体が、そのパウロの手紙を回し読みするようになって、今に至っているというわけです。

わたしたちが御言葉に導かれて、今の自分自身を外側からと言うか、自分のものの見方ではないものの見方で見直してみる。そのときに色々、「これが足りなかった」とか気付かされることがある。それこそが神様の恵みと言って良いと思います。

今日もこのごミサを通して神様の恵みを願う。その恵みは、「どうぞわたしたちが神様のところからもう一回自分自身を振り返り、そして今一番気が付かなければいけないことにどうぞ気付かせてください」という、そういう願いと共に恵みを願うことが大切だと思います。

昨日がロザリオの聖母の記念日でありましたので、今日はこのごミサの中の最後にご一緒にロザリオの祈りを一連だけですけどしたいと思います。

共にいてくださるマリア様との親しい対話のうちに、わたしたちが自分自身をもう一回見直し、そして大切なことを見出して行く。誰も対話の相手がいないと、自分の考え方の中だけに閉じ籠ってしまう、そしてそれがどんどん、どんどん極端な方に行くということがある。でも、マリア様との対話、そして神様の恵みによって、わたしたちは今の自分の姿ということを見直し、それに絶望するのではなく、その大切な気付きを与えられたことに感謝して、また歩んで行くことができるんだと思います。

そのように、今わたしたち一人ひとりが気付く必要があることに、神様の恵みによって目を開くことができますように、恵みを願いながら、このごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>